

「新収蔵・寄託作品公開 心からのおくりもの」は、近年寄贈・寄託された高崎市や群馬県ゆかりの作家と、同時代を歩んだ作家の作品を「群馬、高崎ゆかりの作家たち」「魂の印象派 木村忠太」「鶴岡政男の素描」というテーマでご紹介する展覧会です。作家たちはそれぞれ何かにときめき、あこがれ、そしてめざめ、ゆめを抱いて人生を歩んできました。今回は鶴岡政男（つるおか・まさお 1907-1979）の「めざめとゆめ」について解説します。

① 鶴岡政男のあこがれ

私生児として高崎市に生まれた鶴岡政男は、美術館隣の南小学校に1年、4年生の時通いますが、上京し1922年、画塾の太平洋画会研究所に入り、1930年にNOVA美術協会を結成し画家として出発しました。1937年、騎兵として赴いた中国で戦争の非人間性に悩み、帰国後も生活のため絵から離れます。しかし1943年、画塾時代の仲間と新人画会を結成。のち早世する^{あいまつ}鬚光や松本竣介も代表作を出品し、翌年の3回展まで戦時下に創作の灯火をともし続けた「戦後美術の起点」とされています。東京大空襲で家屋と作品すべてを焼失し、谷中の借家で戦後が始まります。

② 鶴岡政男のめざめ

鶴岡は1946年頃、家族、身近な生活の素描から再出発します。当時好んだ《馬》には必ず肛門、鶴岡のいう「馬のケツメド」を描き入れます。「まさおは、馬のケツメドを見る／まさおは、／まさおのケツメドを思う／まさおは馬のケツメドを見て／こぼすだろう」と、馬の尻ばかり見て暮らした騎兵生活の悲喜こもごもを滑稽な詩に残していますが、開いたケツメドは、戦いから逃げることで、決して負けない、曲げない生き様を描く自画像です。《恋人2》も当時趣味と家族レジャー、生活の足しに日課とした磯釣りの魚がモチーフ。《^は這ふ幼児と立つ犬》も生まれたばかりの三女がモデル。《馬》はやがて油彩《森の騎手》に、《恋人2》も油彩《魚》に、《這ふ幼児と立つ犬》もガラス絵《少女(B)》になりますが、そのままの下絵ではなく、まず手が自在に動き出し、そこから少しずつ絵が立ち上がるように繰り返し同じイメージを、画材やタッチを変えながら描いたことがわかります。三女が生まれる直前の1948年6月、親友、松本竣介が早世します。病を押し無理を重ねた竣介の死に「やたらに腹が立ってしょうがなかった」と絶句しながら、鶴岡は「彼は愛憎を持ち真に怒る事の出来る者の一人であった、たとえ画業のなかばに逝ったとしても総ての事柄は現在に於て意義がある。バトン^はは渡された」と記し、その追想文を竣介の言葉で結びます。「例へ私が何事も完成しなかったとしても正しい系譜の筋として生きていたならば、やがて誰かがこの意志を成就せしめるであらう」と。怒りや悲しみを恐れずまっすぐにみつめ、描くことから逃げないために、鶴岡は他の一切から逃れ続けました。

③ 鶴岡政男のゆめ

「日本の絵というものは、全体に物を描かないと思うのだよ、物を…。事を描いていると思うのだ。事は物でもって表現されなければならないのに、物を忘れて事を描こうとしている」—1954年、雑誌座談会での発言は、鶴岡の代名詞になります。でも展示室を見回すと、物らしい物が描かれていないと感じます。どういうことでしょうか？物を物で表現する、つまり物そっくりに写すことは、テクニックさえあればできる。また事を事で表現する、つまり看板のように内容そのままを伝えるのもテクニックでしょう。一方「物でもって事を表現する」とは、心のリアリティを描くことではないでしょうか。つまり心の内なる「事」を、絵という「物」にどう描くかということ。鶴岡にとって物を描くとは、手段であって目的ではない。しかし画家が事＝イメージばかり考えすぎると、現実の肉体や生活から離れて、リアリティのない絵空事に終わると考えた。肉体、生活、絵具まみれにならなければ、描けないということです。鶴岡の絵は素描の線から始まりました。そして1961年頃から指で直接「描くという行為が何か愛撫（あいぶ）することにも似てデリケートである」パステルや、コンテにのめり込み、油彩にも広い色面が目立つようになります。線を色の広がりに変えることは、体まかせの線から少しずつ離れてイメージを落ち着かせ、「絵にならないものを描こうとする」心の営みにほかなりません。画材やタッチを変え、同じイメージを繰り返し描くことは、心と体と世界を丸ごとみつめようとする鶴岡の、終わりのない闘い。《赤テーブル（青いカーテン下図）》と《青いカーテン》（参考図版）を比べると下図はコミカルでエロティックでまがまがしい生の表現ですが、《青いカーテン》は象徴として静まり返り、むしろ底知れない淵をのぞき込むような、不穏な冷たさが迫ってきます。素描に表れる生の肉体、鶴岡の「物」は、油彩に象徴される生活感情と、その先に静まり返る死生観、つまり鶴岡の「事」につながっていくのです。

「鶴岡政男の素描」
展示室のご案内

3階

第4展示室

《這ふ幼児と立つ犬》《馬》《恋人2》



《赤テーブル（青いカーテン下図）》



《作品》



《夜の騎手》

